「日々の理科」（第 2914 号）　2022,-7,29

# 「ヒカリゴケ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

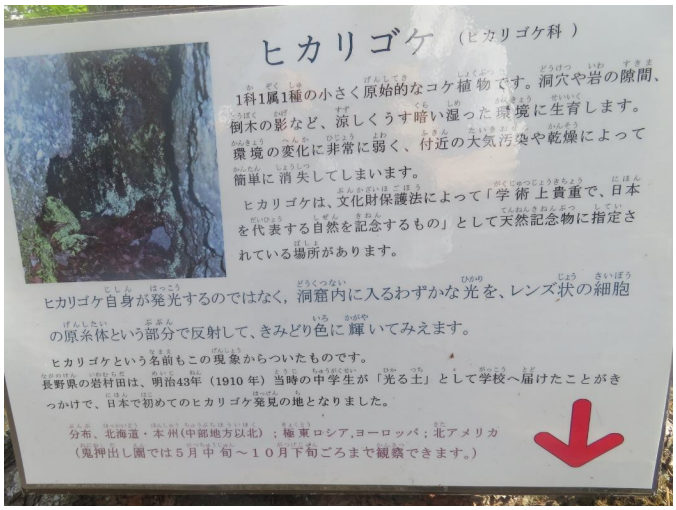
お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

「ヒカリゴケ」は珍しい生物である。「ヒカリ」とは言いながら、私は自生している場所を２カ所しか知らない。

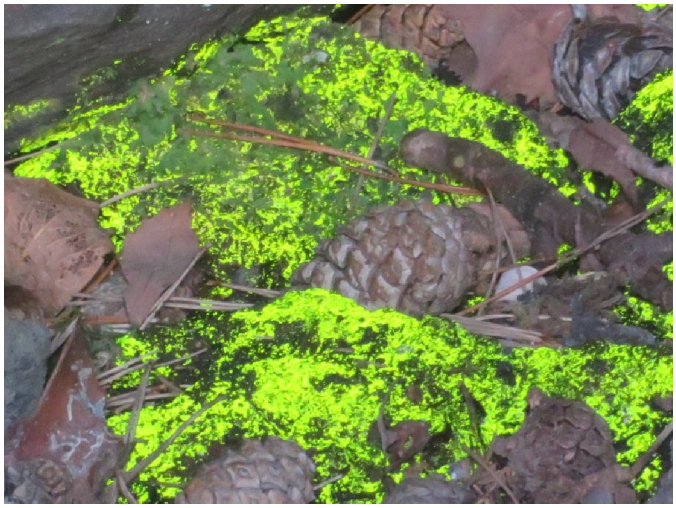
一つ目は、群馬県の北西部にある「本白根山（もとしらねさん）の登山道だ。案内書に「登山道の脇にヒカリゴケが見られる」と書いてあるが、現地には案内板はなく、よほどよく探さないと見過ごしてしまうだろう。本白根山のヒカリゴケは、ミズゴケの隙間にひっそりと光っていた。「ヒカリゴケ」の名はついているが、自発的に光を放つわけではない。従って「ゲンジボタル」（成虫が発光）「マドボタル」（幼虫が発光）「ツキヨタケ」や「ヤコウタケ」（菌体が発光）のような「発光生物」には分類されない。

浅間山の「鬼押出し園」にもヒカリゴケがある。こちらは遊歩道の脇に立派な指導標があるので、ほとんどの入園者は立ち寄って観察している。




有難いことに、詳しい案内板も設置されている。「１科１属１種」「原始的なコケ植物」「レンズ状の細胞が外光を反射」などの情報が書かれていて、勉強になる。

ヒカリゴケは溶岩の隙間の洞窟状の場所にあった。奥のほうで明らかに緑色に光っている。



私はヒカリゴケは溶岩の上に生息しているのだと思っていた。しかし案内板に「光る土」と書いてある通り、どうやら岩ではなく土に発生するらしい。ほんの少しもらって顕微鏡で見たいが、そうもいかない。